

体験農園で野菜づくり。 農業にはまる人が急増中！

～東京都練馬区「加藤農園」

農家の農地を使い、プロの農家が一般の人に年間を通して野菜づくりを教える。日本でも初めてのカルチャーセンター方式の区民農園が、東京都練馬区に誕生したのは1996年。その第1号は、加藤義松さんの畑から始まった。



都市農業の存続をかけ行政と連携

都市化と重税や高齢化で次々となくなっていく都市農業のなかで、なんとか農業を守りたいという思いからだった。区民農園が人気ななかできちんとした野菜づくりを学びたいという区民のニーズと、練馬区と農家の都市農業と区民の理解を深めたいという思いとが一致し、体験農園づくりは、4年間の準備期間を経て始まった。

スタートして10年以上を経過した体験農園は、プロが教えることで野菜づくりがうまくできると参加者には大好評となった。とくに中国からの輸入野菜の農薬問題が騒がれてからは、どちらかというと参加者は、定年退職した人を中心に年齢層が高かったが、若い家族が自ら野菜を作りたいと参加するケースが急激に増えた。

農家にとっても10a当たり100万円と、安定した収入が得られ、練馬区としても、これまでの区運

営の区民農園とは異なり、メンテナンスの費用がかからない。しかも区民から評価が高かったことから毎年開設が行われ、現在、練馬区では13戸。さらに都内でも50戸に広がった。参加者は3,500人までになった。

98年には農園主の「園主会」が誕生した。農家が開設するには、運営や設備面でのアドバイスが必要だということと、また東京都や国の支援も受けやすくするためである。これで、外壁や水道、トイレ、休息所など諸設備の都や国の補助(その4分の3)が可能にもなった。園主会会長となったのが加藤義松さんだ。2008年度には、都内の体験農園は60戸になる予定。将来は100戸をめざしている。

さらに練馬区のノウハウは、福岡県福岡市、埼玉県上尾市・所沢市、千葉県松戸市・習志野市、茨城県つくば市、京都府などにもたらされ、各地で体験農園を開設するところも出てきた。



体験農園の傍らで参加者に講義をする加藤義松さん。加藤さんは著作もあり、『加藤義松の野菜作り塾』（主婦の友社）、『野菜づくり名人の知恵袋』（講談社）など、一般客にも家庭菜園が広がるほどの人気となっている



茨城県茨城町の農家木村弘さんと連携して、田植え、刈り取りのバスで行く体験ツアーが毎年行われている。参加者は小学生を中心に40人ほど。春と秋には木村さんが収穫したメロンを加藤農園で販売する直販も行われている。トラック1台分がたちまち完売する



12年目という古澤之教さん。畑の指導員。茨城県茨城町への田んぼ体験ツアーをまとめているリーダー。その経験が買われて小学校の5年生の稲づくりの講師をし、また、ボランティア活動や区の食育活動にも自ら応募し参加をしている



加藤さんの実地講習を熱心に聴く参加者。アンケート調査によると、「将来、援農や田舎暮らしで野菜づくりをしたい」と考えている人は、21%にもなるという

競争率も高く、やめる人は少ない

体験農園のさきがけとなった加藤義松さんの農園を見てみよう。

加藤農園は、西武池袋線池袋駅から20分の保谷駅から徒歩10分のところにある。この地域はほとんどが住宅地になった。それでも比較的開発されなかったために、都区内では最も農地が多く残る地区だ。

加藤さんは300年続く農家。115aの畑があり、カルチャーセンタータイプの体験農園は60a。残り55aは、幼稚園と小学校向けの体験農園、畑にあまり来られない人のための「はたけ倶楽部」、オーナー制度の柿の木畑となっている。すべて参加型の農園で、一般の農家のような野菜栽培で野菜そのものを販売するものはない。60aの体験農園は、30㎡で148区画ある。参加者は1区画を使って1年間を通して、加藤さんから講習を受けて野菜づくりを学ぶ。

毎年4月開講。インフォメーションは練馬区が行い、申し込み・受け入れは各農家で行う。1年契約だが、5年間更新ができる。

「今年は、新しい人が20人ほど。更新率は90%以上です。やめる人は少ないです。5年たって卒



講習はボードを使い、その日実施する作業を具体的に紹介する。区画割りされた農園と平成20(2008)年度の春の作付け計画。03年に東京農大で、体験農園30㎡で1年間できる野菜を市販で購入するとすると、どれくらいになるのか試算が行われた。1年間にとれるのは270kg。金額にして9万2,000円。参加費以上に十分採算はとれている、というわけだ



農園には、鍬、ジョウロ、バケツなど、必要なものは揃えてあるので、参加者は、手ぶらでも行けるのが魅力。種は、当日、必要な分だけが個別に配布される

業して、また申し込んでくる人もいます」と、加藤さん。競争率は4倍という人気。同区の光が丘にある体験農園では19倍という。

年間参加費は4万3,000円。区民には練馬区から1万2,000円の補助があり、3万1,000円で参加できる。園に鍬、種、堆肥、ジョウロなどが用意されている。講習は、金、土、日曜日の10時から。受講生には1年間の作付け計画のスケジュールが配布され、それに沿って栽培をする。

春作は、トウモロコシ、サトイモ、ダイコン、小松菜、ホウレンソウ、ピーマン、ナス、トマト、エダマメなど。秋作は、シュンギク、ニンジン、チンゲンサイ、カブ、キャベツなどで、年間を通して約40種類の野菜を作る。

加藤さんが講習をし、その後、実際に加藤さんがやってみせて、それを各人が自分の農園で行う。わからなければ、加藤さんに気軽に尋ねることもできる。また、5年目以上の参加者で、腕に「指導員」の黄色い腕章をつけた人が6人いて、その人たちも気軽にアドバイスをしてくれる。

農業への理解者が次々と増える

参加者に何人か話を聞いてみた。



12年目の後藤勇さん。「ゴルフ、料理などいろいろな会があっておもしろいと人づてに教わり、参加しました。野菜づくりよりもサークルに興味があって参加し、野菜づくりにもはまりました」と言う。元商社マンで豊富な海外経験を生かし、加藤農園の海外農業研修ツアー担当



6月にはみんなが持ち寄っての食事会も行われる。また、メンバーに料理家もいることから、2か月に1回は料理会も行われている



体験農園参加者での海外農業研修ツアーも毎年実施されるようになった。これまでベトナム、ハワイ、台湾、中国、タイなどを視察。海外旅行のパッケージに現地の個人農家訪問を組み込み、海外農家との交流を深めている

「今年、練馬区に引っ越してきたばかり。ニュースで食品偽装事件などで食の安全が話題になっている。私たちが、健康のためにも安全な食べ物を食べたい。なにが安全かといえ、究極は自分たちで作るしかない。そんなとき雑誌の『るるぶ』を見ていたら、近くに野菜づくりを教えてくれる農園があると知りました。手ぶらで参加できるというので夫婦で参加しました。なにもわからないから、講習があるというのがとてもいいです」(20代の夫婦)

「田舎暮らしをしようと福岡に準備をしています。野菜を栽培しながら暮らそうと計画していました。ところがよく考えたら、野菜なんか栽培したことがない(笑)。そこで口コミで、近くに体験農園があると教えてもらって、さっそく申し込みました。今年が2年目。1年目に加藤さんの言うとおりに栽培したら、みごとに野菜ができた。秋に、練馬区役所の人に来て審査会があるのですが、よくできたというのでなんと優秀賞をいただきました。自分でもびっくり！ いっぱい野菜ができて、去年は野菜をまったく買いませんでした」(50代後半の夫婦)

この体験農園、じつは、農家も考えもつかなかったようなことが次々と誕生した。農園で野菜づ

くりをマスターして、田舎暮らしを準備し、実際に実行する人たちが30代から50代で5人も誕生した。行く先は群馬県、山梨県、茨城県などだ。

また、さまざまな仕事や技術、趣味をもつ人たちとの交流が生まれ、そこからいくつものオフ会が生まれ、茨城県の農家と連携した田植え体験、野菜を使った料理会や海外の農家を訪ねる海外農業研修ツアーまでができたのである。

「体験農園は一般の方々に農業を理解してもらうには最高の場所。また、参加者の結びつきが強くなり、農家側も新しい知識が得られる。若い参加者が増えて、『農業』が憧れあこがになっている。時代の需要が大きく変化した。これからはもっと供給が増えると思います」。加藤さんはきっぱりと、それもとびきりの笑顔になった。



金丸弘美

(かなまる・ひろみ)

食総合プロデューサー。食のワークショップのプランニング、幼稚園から大学まで各学校での食の講座などを手がける。著書に『創造的な食育ワークショップ』(岩波書店)、『給食で育つ賢い子ども』(木楽舎)ほか多数。